

第 12 回 日本がん・生殖医療学会学術集会

P-12

名古屋, 2022. 2. 11-13

当院の過去 10 年間における卵子凍結の現状

矢嶋 秀彬¹ 門上 大祐¹ 藤原 奨¹ 森本 真晴¹ 太田 志代¹ 北山 利江¹

山内 博子¹ 勝 佳奈子¹ 中岡 義晴¹ 森本 義晴²

1. IVF なんばクリニック 2. HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

卵子凍結は、未婚のがん患者に対する妊孕性温存療法の選択肢の一つとして広く普及している。一方で、原疾患治療後の経過や婚姻等の社会的背景などから、卵子融解が行われる症例は限られている。今回、当院での卵子凍結を目的とした妊孕性温存治療の現状、並びに卵子融解-ICSI を行った症例について報告する。

【対象と方法】

2010 年 1 月から 2020 年 12 月の期間に、妊孕性温存目的で当院へ紹介となった患者 196 例のうち、卵子凍結を行った 70 例を対象とし、後方視的に検討した。

【結果】

対象は全例未婚女性で、初診時年齢は 32.3 ± 8.6 歳であった。原疾患の内訳は、乳癌 47 例、血液疾患 15 例、消化器疾患 3 例、婦人科疾患 2 例、その他 3 例であった。卵巣刺激方法は、アロマターゼ阻害薬を併用した調節卵巣刺激が最も多く、ランダムスタート法は 21 例で行った。症例あたりの採卵周期は 1.6 ± 0.9 回、凍結 MII 卵子数は 7.4 ± 4.5 個であった。原疾患治療後に妊娠を希望し、当院へ再受診した 4 例(乳癌 3 例、血液疾患 1 例)で卵子融解-ICSI を行った。融解後の卵子生存率は 95.0% (38/40)、受精率は 78.9% (30/38)、移植可能分割期胚獲得率は 43.3% (13/30) であった。内膜調整は全てホルモン補充周期で行った。移植は凍結未受精卵子融解後に ICSI を行い、最良好分割期胚を 1 個移植した。余剰胚は全て分割期で再凍結した。移植を行った 4 例 7 周期のうち、2 例で妊娠成立を確認し、現在いずれも妊娠継続中である。

【考察】

当院での卵子凍結症例では、融解後の生存率、受精率は共に過去の報告と同等の結果であり、妊娠成立まで至った症例も確認できている。未婚のがん患者にとって、卵子凍結は有効な妊孕性温存治療の一つであると考えられた。今後、余剰胚の取り扱いにはさらなる検討が必要であり、引き続き長期的な観察とデータの集計を行っていく。